

ジャガイモと映画 (34)

<栽培 (1)>

Web ジャガイモ博物館館長

あさま かずお
浅間 和夫

114. 偉大なる王者

(原題：Der grosse König)

1940年、ドイツ映画。監督：ファイト・ハーラン。

プロシア建国の祖と呼ばれたフリードリヒ大王（在位：1740～86）が、オーストリア軍と交戦中にロシア軍の奇襲を受け、わずか数名の側近と共に農家に潜んで難を逃れるほどの敗戦を喫するが、苦しみに耐えて軍を再編成し侵略軍に向って決戦を挑むものである。ナチスの国策映画であり、この内容については詳しくは判らない。監督は1936年映画『青春』を作成したが、主演はフリードリッヒ大王役で定評あるotto・ゲビュールが務めた。フリードリヒ大王は、オーストリアなどと戦って領土を拡大し、弱小国だったプロイセンをヨーロッパの列強にまで高めたことで知られ、フランス的芸術を愛し、フランスの哲学者・ヴォルテールと親交を結び、即位後はすぐに拷問を廃止したりした。在位は長く、啓蒙専制君主として知られた。

ジャガイモがヨーロッパに入ったのは16世紀半ばから1570年ころと思われるが当初珍奇な植物として薬草園などで栽培されていた。しかし、これに着目したのがこのフリードリッヒ大王である。在位中にプロシアはイギリスと組んでオーストリアやフラ

ンスとの間で七年戦争（1756～63年）をした。この戦争の末期の10ヶ月は停戦交渉であった。その間兵士達は食糧の調達をしていたが、そこでジャガイモの素晴らしさを知ることになりジャガイモ戦争とも呼ばれている。ジャガイモは、地上に稔るムギと比べ戦乱の影響が少なく、収量は10倍もあることから、王はこのころ多かつた飢饉の解決にも役立つと考え、ベルリンのルストガルテンで栽培させ、宮廷のコックに新しい料理法を工夫するよう命じた。また料理の小冊子や栽培の手引きなどを人びとに配布した。ポンメルン地方に種いもを配布し、「5月初めに農民がジャガイモ栽培に励んでいるか検証せよ」と指令を出し、それを拒むすべての者の鼻と耳を切り落とすと脅したこともあった（写真は、1886年ロベルト・ヴァルトミュラーが『王はあらゆるところに』と題してジャガイモ畑を見回るフ



写真1 栽培事情を視察する王

リードリヒ大王を描いたもの)。ジャガイモの普及に尽力した王の墓はポツダム中央駅から約4 kmのサンサーシ宮殿にある。そこでは時期となると花が飾られ、ジャガイモはいつも供えられている。

115. メトロで恋して

(原題 : Clara Et Moi)

2004年、フランス映画。監督:アルノー・ヴィアール。

8月のパリ、32歳の売れない俳優アントワヌ (ジュリアン・ボワセリエ) はある日地下鉄で偶然目の前に座ったクララ (ジュリー・ガイエ) という女性と出会う。彼女は28歳の作家の卵で、ウェイトレスのアルバイトをしている。そんなクララから電話番号を教えてもらったアントワヌは、間もなくデートするまでになる。デートを重ねるうち、美しく、自由で寛容な理想的な女性とわかり恋に落ちる。やがて、アントワヌはついにクララとの結婚を決意する。そして、結婚に向けて健康診断を受けた二人だったが、不治の病であるヒト免疫不全ウイルス (HIV) プラスという診断を受ける。

アントワヌはその事実が受け入れられず、二人の間には距離ができ、親友のBT (アントワヌ・デュレリ) や、姉のイザベル (パスカル・アルビロ) に相談する。やがて彼は6年ぶりに、名医である父 (ミシェル・オーモン) を訪ねる。打ち解けて話すうちに、アントワヌはクララの苦しみを受け入れたいと考えるようになる。そしてアルゼンチンに行くことと決めたクララの送別パーティーの最中、アントワヌは彼女を訪ね、一緒に暮らしたいと申し出る。

とまどうクララは、パーティーの部屋へと立ち去り、窓からアントワヌを見て微笑む。このあと二人はどうなるのか。切なくピュアなラブストーリーであった。



写真2 メトロにあるパルマンティエ像

デートはもちろんパリの名所、セーヌ河岸、エッフェル塔などであったが。ジャガイモ好きの筆者にはメトロが一番引かなかった。メトロ3番線にパルマンティエ駅 (Parmentier) があり、今はジャガイモ駅 (Pommedeterre) と呼ばれており、その駅にはパルマンティエの像がある (写真)。彼は七年戦争 (ジャガイモ戦争) の際にプロイセン軍の捕虜になり、聖書にも載っていないジャガイモを食べさせられるが、それが戦争や飢饉の時に役立つ素晴らしい食べ物であることを知る。帰国後食べ物コンテストに応募し、当時ハンセン病を引き起こすなどと嫌われていたジャガイモを身近なものとし、雷が電気であることを明らかにしたベンジャミン・フランクリンや近代化学の父アントワヌ・ラヴォアジエなどの有名人を夕食会に招いてジャガイモ料理を出したり、ルイ16世や王妃マリーアントワネットにジャガイモの花束を贈るなどの広報活動も行なった。そしてジャガイモ

の畑を貴重なものであるとしてわざわざ昼間は兵士に守らせて民の興味を抱かせ、夜は兵を引き上げさせる方法で、わざと市民にいもを盗ませる、などの方法でジャガイモを広めた。今日でもジャガイモ料理の多くに Parmentier の名がついている。

116. いもと男爵と蒸気自動車

1979年、NHKのテレビドラマ。

ディレクター：伊丹政太郎。

川田龍吉（愛川欣也）は父の川田小一郎（三菱創立、後に日銀総裁）にしたがって土佐から東京に出て慶応義塾に入学する。その後造船技術を学ぶために先進地スコットランドのグラスゴーに行く。帰国後、横浜船渠第一号船渠（現在ランドマークタワーのそばで「太平洋の白鳥」こと帆船日本丸を係留している第一号ドック）をつくる。その後1899年渋沢栄一の指名で函館ドック再建のため北海道に渡る。日露戦争後、配当を可能にしたものの1907年には一部が函館大火に遭遇し苦労が続いた。園芸にも関心があったので函館近郊の七飯町に農場をつくる。そして1908（明治41）年前後に「男爵薯」ことアメリカの「Irish Cobbler」や異名同種の「Eureka」などをイギリスから導入する。これが今日全国に栽培される基となったのはあまりにも有名である。

ドラマで愛川欣也がアメリカ製蒸気自動車ロコモビルスタイル・2・スタンダード

に乗って走るシーンが忘れられない。この車は川田が横浜時代（1891年）に貿易商から2,500円で購入したものである。これで日本初のオーナードライバーになり、後に函館に持ち込み、市内の自宅と農場があった七飯や上磯との間の往来などに使用し、マイカー通勤の元祖ともなった。

この道は今の国道5号線であり、薯判官こと湯池定基らの植えたアカマツ並木で知られている（写真）。現在この車は北斗市当別の男爵資料館に展示されている。



写真3 男爵薯発祥の地 記念碑（七飯町）

このロコモビルの燃料はナフサで、ボイラーで蒸気を発生させて走るものであった。出力は3～4馬力、速度は20～40km/h。故障して長い間北斗市当別の川田農場倉庫に放置されていたが1978年NHK札幌の伊丹政太郎の目にとまり、東京工業大学一色尚次教授の協力を得て愛川が乗れるまで復元してドラマのシーンに活かした。